
angel's tears

都神紗茅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

angels tears

【コード】

N0042C

【作者名】

都神紗茅

【あらすじ】

新一が姿を消すなど、激動の高二から一年。新一、蘭、園子は高三になった。帝丹高校では、去年の文化祭のやり直しが行われることになった。そのまま持ち上げになった新一らのクラスでは、去年の文化祭で途中までしか出来なかった劇『シャッフルロマンス』に代わって『白雪姫』の劇をやることに。そんな中、彼らのクラスに転校生がやってきた。

第一話 文化祭、再び（前書き）

典型的な転校生ネタです。当たり前ですがオリキャラが出てくるので、苦手な方はお気をつけください。

第一話 文化祭、再び

色々なことが終わりを告げ、新一らの中では高校三年生としての一年が始まっていた。

帝丹高校では二三年でクラスが繰上げなので、彼ら三人はまた同じクラスになった。

そんな彼らのクラスでは、新生クラス早々学園祭の話し合いが行われていた。

早々というか、本当はもつと焦らなくてはいけなかった。

本番まで、のんびりしているほどの時間は無い。

話し合いにも参加しているが、生徒たちはそれぞれのおしゃべりに華を咲かせていた。

帝丹高校では一クラスで必ず一つは出し物をしなくてはいけない。一年前の学園祭では事件が起こったため、本当なら三年に一回の学園祭が特別に今年行われることになったのだ。

もちろん、クラスが一年前にやった出し物の劇は未完のままだったので、生徒たちはみな喜んでいた。

「文化祭で、ウチのクラスでやる出し物について決めたいと思います。何か意見がある人いますか？ 手挙げて、意見を言ってください」

幾つか手が挙がったその中で、高く上げられた園子の手は学級委員の目を捉えた。

捉えた、というよりも捉えられてしまった、と言ったほうが正しいのかもしれないが。

「じゃあ、園子どうぞ」

学級委員が園子を指した。園子は返事をして、さっと立ち上がる。

「白雪姫の劇をしたいです！ もち、キスシーン入りの。白雪姫役は蘭で、王子役は新一君がいいと思います」

何か訳ありげな笑顔で、名指した彼らのほうを見る。その園子の後に続いて、当人らが同時に立ち上がり、言った。

「え？ わたし、反対です」

「オレも」

意見に反対したのは、真っ赤な顔の当人だけである。この二人というのは、名指しされた新一と蘭のことだ。しかし他の生徒らは、それに余計に盛り上がってしまった。

「工藤。これはチャンスだぞ！ 毛利に全校生徒の前でキス。こんなおいしい設定、他にないぞ」

「他の男、寄り付かなくなるかもね」

「蘭、やりなよ！」

白雪姫のラストにある、キスシーンについてだけ皆が騒ぐ。新一は男子たちに、蘭は女子たちに必死で反論している。しかし二人だけでは、対抗し切れなかった。

園子は当人らのその姿を見て、更にニヤついている。

この様子から学級委員は園子の意見をokとし、園子に脚本等を頼んだ。

民主主義なクラスであるから、認めざるを得なかったのだ。

主役よりも気合の入っている園子は、蘭に向かってウインクを投げた。

「心配しなくてもラブラブなのにしてあげるから、待っててねん」

それから椅子に座り、前の席である蘭に向かって皆に聞こえるように言った。

皆はその言葉に反応して、二人の会話に耳をそばだてていた。

「ちよつと園子。なんでわたしと新一に決まっちゃってるの？」

顔を真っ赤に染めて、蘭は園子に言葉で詰め寄った。園子は蘭の

その様子を見て、

「だって〜。キスぐらい何でもないでしょ？ 旦那なんだから」

と、当たり前のように言った。

「ちよっ……バカね、旦那じゃないわよ！」

真つ赤な顔で園子に本気で反論をしている蘭を見ているのは、新
一。

もはやあきらめたようすで、頬杖をついていた。

皆の視線は、その新一から離れて蘭のほうに向かっている。

蘭は、からかいがいがあるからだ。

自分にとっては興味なさそうにしているのだが、本当は違った。

翌日のホームルームに、園子が自ら製作した台本を皆に配った。

一日で仕上げるとは、昔からずっとアイデアを温めていたのか。

誰もが聞いたが、あえて暗黙の了解となった。

「おい園子！」

「ちょっと園子！」

皆が台本に目を通していている中、蘭と新一が同時に大声を上げた。園子は、近くにいた蘭のほうに身を乗り出した。

「何、誤字？」

顔を真っ赤にしている蘭とは真逆に、園子は平然としていた。蘭の持っている台本を、後ろから眺める。

「誤字じゃなくて……最後のシーン、直接って」

蘭の持っている台本は、最後のページが開いてあった。

園子の作った台本の構成は、劇の概要も載っていた。

それから一頁捲ると、台詞や細かい指示等のページが続いていく。最後のページには、直接五秒間のキスと大きく書かれていた。

「何言ってるのよ、今更。皆！ 台詞出来るだけ覚えてきて。特に蘭、新一君。明々後日からは、教室で朝練始めるからね」

蘭の言葉を軽く流し、皆に向かって園子はそう言った。それを聞き、他の生徒は全員台本に目を落とし始めていた。しかし新一と蘭はそうしていなかった。

「オメー、絶対仕組んだろ？」

嬉しそうに笑みを浮かべている園子に向かって、頬杖をつきながら言った。

(この女^{アマ}……)

新一は心の中で、園子に毒づく。

「ひひひひ」

それが届いているのか、届いていないのか。

良くは分からなかったが、園子は口に手を当てていた。目論見どおり。まるでそう言っているような姿だった。

夕方、新一の家にて。

嫌だが、一応台詞あわせのために蘭が新一の家に来ている。

「ああ、私の心に響くあの澄んだ美しい声の持ち主は、一体何者なんだ？　って、何だよこの台詞。これを全校生徒の前で言えってか」

新一はソファアールの上で、途中まで意外と感情をこめて読んでいた。しかし読み進めていくうちに恥ずかしくなり、新一は台本を閉じて大きなあくびをした。

「もー、園子ったら」

ココアを入れながら、蘭も同調するように言った。
パラパラと台本を捲ってみたが、さっきの様にどれも歯の浮くような台詞ばかり。

しかも、王子と白雪姫が抱き合うシーンもあるらしい。

これは絶対に園子の策略だ、と二人とも確信した。

「なあ、蘭」

新一が何気なく話し掛けたので、蘭は髪をかきあげ、ココアの入ったカップを机の上におきながら、何？と答えた。

「オメー、オレと絡むシーンあつから嬉しいのか？」

「え」

蘭は一瞬、焦ってカップを倒しそうになった。

からかいの言葉だと分かっていたが。その後で、何言ってるのよ、と言った。

「し、新一こそ、わたしとキスできるから嬉しいんじゃないの？」

さっきの仕返しに、蘭は新一を逆にからかってみた。すると、

「んなわけねーだろ！」

顔が真っ赤になっていた。これでは、はいそうですと言っているのに等しい。

それでも、他の男が主役にならなかったので良かったとホッとしているのだ。

しかし蘭はその新一の気持ちに気づくことなく、くすくす笑う。思いがけなく反応してしまった新一自身は、自分の気持ちに蘭が気づいてないと知り
心の中でほっとしていた。

ちなみに、園子本人は蘭を別の男と絡ませることはない、と思っ

ている。

「……」

しかし蘭は、笑っていたかと思っただけなら急に俯いて黙り込んだ。新一は何事かと気になり、思わずソファから立ち上がった。

「蘭？」

俯いている顔を、恐る恐るそつと覗き込んでみる。

まさか、蘭は、実はあの言葉を真に受けていたとか。

頭の中に、何だか嫌な予感がしてきた。

さつきはくすくすと笑っていたけど、本当は傷ついていたんじゃない。そう感じた瞬間、蘭が急にぱつと顔をあげた。

突然のことに、新一の体がびくつと動いた。

「新一のバカ！ そんなにハッキリ言わなくてもいいじゃない。探偵の癖に、どうして分かってくれないの」

そして、一気にまくし立てて大声でそう言った。

新一をまっすぐ見据える彼女の瞳は、誰が見ても分かるように潤んでいる。

「わ、悪かったよ……蘭」

そんな彼女に新一は酷く動揺し、なんとか慰めようと試みた。しかし蘭の両肩をそっと掴んだだけで、その後は何も出来なかった。自分が思っているよりもひどく動揺しているようで、何も出来なかった、と言うよりも何をしていたかわからなかったのだ。

「フフッ」

「え？」

性に合わずおろおろしている新一に、蘭はなぜか急に笑い出した。肩を掴んでいる新一を、そっと両手で押しつけて。

零れそうな涙を指でぬぐって、そうしながらもずっと笑っている。

「もう、どうしちゃったの新一？ これ、演技だよ」

「えんぎ？」

蘭は涙の残る指を、嬉しそうに左右に振る。

それを目にしてもまだ、新一は間抜けな顔をしていた。内心、脱力していた。

今起こっていることが、全く理解できていないのだ。

ただただ目の前の彼女を慰めようと、少し躍起になっていたのかもしれないが。

「見抜けなかったの？ 探偵の癖に」

「ハハハ……」

蘭はどこかいたずらっぽい顔で、誇らしげに言った。

よっぽど自分を騙せた事が嬉しいのだろうか？

自問自答してみるが、蘭の真意はなぜか掴めない。

頭を回転させていたら、体の動きがぴたりと止まってしまった。

「ねえ、練習しよ？ 台詞あわせ」

そんな新一に、蘭は何も無かったかのように笑顔で話し掛ける。

「あ、ああ」

新一のその答えは、素っ気無い返事だった。

まだ脱力から開放されていない部分もあったが、本当は安心してい

た。
自分の言葉は、蘭を傷つけていなかったということをやっと実感して。

ココアを一口飲むと、二人は練習を始めた。蘭が新一の隣に腰掛けて。

シーン一

白雪姫（以後“白”）「ラララ〜」（小動物たちと歌う）

王子（以後“王”）「ああ、私の心に響くあの澄んだ美しい声の持ち主は、一体何者なんだ？」

ナレーション（以後“ナ”）動物たちは、白雪姫の歌声に惹かれていく。どんどん、集まってくる。

シーン六

白「あの、あなたは？」

魔女（以後“魔”）。園子が演じる（「お嬢ちゃん、このリングをお食べ。おいしいよ……」

白「はあ」「リンゴを一口食べる」

「…」（倒れる。リンゴを落とす）

魔「うひひ……」

シーン十

小人たち「王子、白雪姫に、キスしてください。そうすれば、呪いも解けるそうです」

王「ああ。分かった」

メモ：白雪姫の顎に手を添えてから、王子は白雪姫に直接キスをす
る（五秒以上）

「じっ、五秒以上？」

二人の顔はまるでリンゴの色のよう。そう。五秒と言うのは、実はかなり長い。

全部の時間からしたらほんの一部ではあるのだが。

今朝は、直接という言葉に反応しすぎて気づかなかったのだ。

白「王子様…」

白雪姫はゆっくりガラスのベッドから降りると、王子に抱きつく（強く）。

王子も白雪姫の体を包み込み、強く抱き返す。

ナ それから白雪姫と王子、小人たちは仲良く暮らしましたとき。

「ラブシーンばかりじゃない、本当に」

蘭は真っ赤になって、改めて言った。

台本を机の上に置き、ココアを一口すすする。

「園子の奴、何なんだよ」

同様に顔を赤らめている新一も、かなり呆れている。

明々後日、朝のホームルーム前。

新一と蘭が登校したときには、朝早い練習だと言うのに生徒たちは全員、台本を片手に準備万端であった。

「やーっと主役登場ね。さあ皆、張り切って行くわよ！」

園子は台本を片手に、ものすごく嬉しそうに叫んだ。
他のクラスメイトも、全員があまり台詞も無いのにやる気満々だ。
主役の二人を除いて。

当の二人は、同時に溜息が出た。

シーン十

「じゃあキスのところ。行くよ、蘭、新一君！」

園子が言った瞬間、誰もが舞台に注目した。皆が期待しているらしい。

練習前に指示されたとおりに蘭はその机ベッドに横たわってから、目を閉じた。

新一は王子に成り切って（嫌々）、蘭の顎に手を添えた。

(これは無理だろ、おい)

しかし、蘭の役の特性上無防備な顔。

それを見て新一は、そこから全く動かなかった。いや、動けなかった。

練習とはいえ、本当にキスするのは絶対に無理だった。この時は、蘭も物凄く緊張していた。

(うわ、凄く緊張する。まさか、新一本当にする気？ やだ、恥ずかしい)

「ストップ！ ちょっと、新一君。本番、どうするつもりなのよ」

園子の声で、蘭は目を開け、起き上がった。

それから舞台上がり、園子が新一に何回も念を押す。
すると新一は、

「だーっ、わあっただよ！ すりゃいいんだろ」

つい、自棄になって言ってしまった。しかも全員の前で。

「えっ？」

新一はやべ、と言う顔をして口を押さえ、立ちすくんでしまった。周りからはこれ以上はないほどの大歓声、それに囲まれる蘭の顔は真っ赤。

ホームルーム

(まったく、とんでもねー事言っちゃまったぜ)

「周りは余計盛り上がってしまい、自己嫌悪に陥っていた。頬杖をつきながら、一日の始まりに似合わないほど暗いため息をついた。

そんな姿を、蘭はチラチラと気にかけるように見ていた。しかしその視線にも、本人は全く気づかなかった。

そんな中、クラスの担任が教室の中に入ってきた。

盛り上がっていたクラスメートらは、なぜか途端に静かになる。

「え、突然ですが、転校生を紹介します。じゃあ、入って」

担任に呼ばれて中に入ってきたのは、かなり美人な女だった。長い睫毛に、潤んだ唇。パツチリとした瞳に、風に靡く長い栗色の

髪。

おまけに制服の上からも分かるように、スタイルもいいようだ。

周りの男子や女子は黄色い声を上げるものの、新一はいたって無反応だった。

それだけではなく頬杖をつきながら、すでに夢の世界へと入っていたのだ。

「安堂美佳子です。神奈川から来ました。どうぞ、よろしく願います」

一礼すると、周りのざわめきに動じることなく空いている席にいた。

彼女の目は、眠っている新一を追っていた。

第一話 文化祭、再び（後書き）

また連載物を始めてしまいました（汗）ただでさえ中々更新できないくせに・・・

第二話 美佳子の狙い

四時限目、化学の授業中。教師の話が呪文のように聞こえる。皆はノートを映すことだけでいっぱいっぴいだった。中にはぐっすり寝ている生徒もいた。一体、何の夢を見ているのだろう。

それでも美佳子はちゃんとノートを取り、黒板の前に立つ教師の話の聞いている。これでも、勉強とおしゃれと恋はしっかり両立できていると思っっている。

その授業中であるが、美佳子の目は、ぐっすり寝ている新一に向いていた。

ここで、チャイムが鳴った。それから教師は次回の授業までの課題について話している。

美佳子は教科書類を整頓し、バッグの中にしまいこんだ。週番が号令を掛け終えてから、美佳子は静かに席を立った。

「ねえ、名前……なんて言うの？」

スカート揺らしながら、美佳子は席に行った。

彼女の経験上、それで動じなかった男子は誰一人としていなかった。帝丹に転校して来た、この日までは。

「ん？」

新一は寝ぼけ眼のまま、美佳子の言葉に少しだけ触れた。

ずっと突っ伏していたため、前髪に軽く寝癖がついていた。そんな新一の姿に半分イライラしながらも、もう半分は、彼をかわいいと思った。彼女の持っていた新一に対するイメージとは真逆になった。

「ホラ、安堂美佳子よ！ 神奈川から来た」

結局はイライラのほうが勝って、美佳子は声を荒げた。そんな言葉にも、新一は全く動じない。特に驚くでもなく、だからと言ってまた眠るのでもなく、立ち上がるでもなく。

そのままの姿勢でどこかを眺めていた。そして新一は、ひと言だけつけ加えた。

「ああ、転入生ね」

それからまた、新一は黙り込んだ。

イライラを抑えるかのように、美佳子は新一の横顔をよく見てみた。暖かくて柔らかな陽射しに照らされている新一の横顔は、綺麗だった。顔が赤らんでいくのを感じた。

やっぱり自分の選んだセンスは悪くないと思った。そんな美佳子は、新一の視線がある一人の女子生徒に向いていることに気づいた。

漆黒の長髪を持っていて、園子と話をしている 蘭だった。

「もしかして、あのロングの子のこと、好きなの？」

わざと新一の顔を覗き込んで、美佳子はそう言った。

美佳子のそんな言葉に弾かれたように、新一は、その表情を一変させた。

顔を上げて美佳子に向けたため、頬杖をしていた手が残っていた。

思いもがけない新一の反応に、美佳子は逆に嬉しくなった。

「あのなあ、さっきから何なんだよ？」

美佳子が見とれたほどの顔とは違い、新一はかなりうつとおしそうな顔で言った。でも、それはやっぱりかっこいいと思った。

美佳子は言葉を進めようと思ったが、一人の生徒によってそれは妨害された。

「新一君、ちょっといい？」

「んだよ、園子？」

新一は席を立つと、その生徒こと園子のところへ行った。美佳子の存在などまるで無視だった。

当の本人の美佳子は、呆気にとられていて、新一の腕を掴むことさえ出来なかった。

驚いた。新一と園子が名前呼び合っていたことと、さっきまで目の前にいた新一の本当の名を知ったこと。

美佳子は新一を、どこかで見たことのあるような顔だとは思っていたが、あまりテレビを見ないため最初は気づかなかった。しかし、気づいた途端、あっという間に美佳子の新一を手に入れたという気持ちは大きくなっていった。

「なあ、安堂さん」

そんな中、美佳子は後ろからの声を聞き取った。

不都合な呼びかけだと思ったが、しょうがなく振り向いた。

美佳子に話しかけたのは、一人の男子生徒だった。

「もしかして工藤のこと好きになっちゃった？」

男子生徒の言葉に答えず、美佳子は自らの質問をぶつけた。

「その工藤君と喋ってる茶髪の子って彼女なの？」

「いや、鈴木は違うぞ。その隣にいる奴がそうだ。まあ、友達以上恋人未満って感じだけだな」

隣にいるのは、さっき新一がずっと見ていた蘭。

美佳子は、園子から蘭へと視界の中心をずらした。

「工藤が羨ましいよ。アイツは美人で頭いいし、それを鼻に掛けないし」

男子生徒は当たり前のように言った。そんなことが頭にきて、美佳子は思わず躍起になって言い返した。

「じゃああなたが彼女を奪っちゃえばいいじゃない。そうすれば、私が」

「無理だって！んなことしたら工藤に殺されるっての。毛利だって、工藤以外の男に興味無いだろっし」

訳が分からない、と美佳子は再度混乱した。しかし短時間で気持ちを無理やり落ち着かせて、一つ聞いた。

「あの子、毛利……なんて言うの？」

「毛利蘭。ウチの高校の空手部主将！」

美佳子は、色々な意味で蘭の名前を聞いたことがあった。しかし無理に反応することもなく、ただ腕を組みなおしただけだった。

「やっべ。俺、昼休みに劇の練習があるから、昼飯早く食わないと」

この日に転入して来た美佳子に、劇のことを知る由はなかった。何となく嫌な予感がした彼女は、さつきとは打って変わってすぐに頼みごとをした。

「ねえ、台本見せてくれる？」

男子生徒が机の中から取り出したのを見計らい、言わば奪い取る形で美佳子は台本を持った。

目を丸くしている男子生徒にも構わず、美佳子はすぐにページをめくり始めた。

『白雪姫：毛利蘭』『王子：工藤新一』この二つの文が、美佳子の目に真つ先に入ってきた。そこから更にページをめくっていくと、更にもう一つの文を見つけた。

それは『キスシーン。直接』美佳子の思考回路が、あつという間に結論を導いた。

まずは、監督 配役の一番下に書いてあった、園子に役の変更を申し出ることを。

美佳子は標的から目を離さないままで男子生徒に台本を返してから、席へと向かった。

「鈴木さん、ちょっといい？」

美佳子は、蘭と話している新一を横目で見つめながら聞く。当人の二人はその視線に気づくそぶりも全く見せず、仲良さげに話をしていた。

そんな様子を目の当たりにして、美佳子の中の嫉妬心が余計に膨れ上がった。

園子は、美佳子の悪意のこもっているような、新一と蘭に向かう目線に気づいたために嫌々ながら美佳子についてきた。

「どうしたの？」

「白雪姫、私に主役をやらせてくれない？」

屋上に行く階段の踊り場で、美佳子は自信満々にそう言い放った。そんな美佳子に軽く戸惑いを覚えた園子は、間を空けてから答える。

「もう練習も始まっているし、今からはちょっと」

まだ園子の言葉は柔らかかった。それが、余計に今の美佳子の気

持ちを加速させた。

「今からでも、台本をくれれば台詞もちゃんと覚えられるわよ」

「二人の役はウチのクラスの全員一致の推薦で決まったから、全員が納得すればそれでもいいけど」

園子の言葉に、美佳子は揺らぎをあらわにする。

全員一致と言うフレーズが、もっとも彼女の中に響いたのだ。

「全員一致って……どういうこと？」

「そりゃあ、安堂さんもさっき見たでしょ？ 仲良さげに喋ってる二人。あの二人、蘭と新一君は、全校公認の夫婦だから。いつもあんな感じでイチャイチャしてんのよ」

園子の説明だけでは、美佳子は状況を全く理解できなかった。

思考に耽^{ふけ}る彼女に、園子はしびれを切らしたようにひと言ぴしゃりと言った。

「話したかったことはそれだけ？」

「え、ええ」

何とか自分を取り戻した美佳子は、ひ弱な声で答えた。その言葉にそうとだけ答えた園子は、静かに階段を下りていった。

美佳子はそれから数秒後に同じ道を辿った。

教室の中では、弁当を食べ始めている人たちの姿が目だった。そんな中で園子は弁当を持って蘭と新一を呼び、どこかへ向かうところだった。

美佳子は腕組みをして、教室の扉に寄りかかりながら考えた。そして、彼女らを見ているところで、あることを思いついた。

美佳子は移動し始めている蘭を睨むと、席に戻り、最近のお気に入りのミステリー小説を読み始めた。事件の展開に、絡み合う人情と愛憎。意外な犯人にトリック。読んでいて全然飽きなかった。

蘭を睨んだ美佳子の視線に、新一は気づいていた。

第二話 美佳子の狙い（後書き）

今回は冒頭部分と最後の一文を除いて、美佳子の一人称です。彼女の心情を分かりやすくするために、あえてこうしました。

そして、今回中心的に書いたその美佳子について。この二話の彼女を一言で表すなら『勘違い女』です（笑）。設定としては、確かに美人でありモテることはモテますが、性格がアレなので彼女自身が思うほどモテないと。だけど、実は優しいところもある・・・と言う感じですね。作者的に結構好きなキャラです。

《追記》

連載が終了した後、この二話を大幅に修正したいと思っています。三人称に統一すべき、と指摘を頂いたのは結構前のことでした。でも、内容が大きく変わってしまうかもしれないし流石に連載中なので止めた方がいいのかな？ と判断したので今に至ります。（大幅に修正と言うのは、お分かりでしょうが一人称 三人称に書き換えることです）

2007.9.9

《追記・その2》

修正完了しました。

- ・ 美佳子の一人称 三人称への変更。
- ・ 最後の美佳子と園子のシーンでの、二人の台詞を変更。

修正するといってから約3ヶ月……

大分時間が空いてしまいました。

2007・12・02

都神紗茅@作者

第三話 教室に渦巻く陰謀

全ての授業が終わり、皆が帰る準備をしていた。
美佳子は新一の席に行くと、一つ質問をする。

「ねえ、工藤君って毛利さんのどこが好きなの？」

新一はあからさまに面倒そうな顔を見ると、椅子から立ち上がった。

「悪いけど、用事があるから」

そう言い残し、美佳子の隣をすり抜けさっさと教室を出て行ってしまった。

（あらあら、相変わらず私には冷たいのね。毛利蘭には思いつきり笑ってたのに。まあいいわ。今回の標的は工藤君ターゲットじゃないもの。って言うか、むしろ工藤君がいないほうがやりやすいわ）

美佳子はそう思いつつ、教室の扉にあった目線を蘭に移した。

蘭は教科書や筆箱類を鞆の中にしまったりしていた。そんな蘭に、美佳子はゆっくり近づいていった。

「？」

その美佳子を、彼女の思惑を知らない蘭は不思議そうに見つめる。その蘭にふっと微笑み、美佳子は話し始めた。

「ねえ、毛利さん」

「安堂さんよね？ 何でわたしの名前を」

「担任の先生から聞いたの」

本当はクラスの男子から聞いたのだが、あえて自然な流れを作るために美佳子はそうした。それから、お人好しそうな顔を作った。

「毛利さん、工藤君のことが好きなの？ 工藤君の席を見てたの、分かったから」

これも彼女の作戦のうちだった。美佳子の席は、蘭のより後ろにあった。新一と蘭のことも男子から聞いたことではあったが、あえてこう言っておけばいいと美佳子は思った。

落ち着いている美佳子と正反対に、蘭の顔はかあつと赤に染まった。

それから両手を振りつつ、蘭は美佳子の言葉を否定した。

「そんなんじゃないよ、ただの幼馴染みよ」と。

この言葉に、美佳子が冷笑を浮かべたことも知らずに。その美佳子は、更に続けた。

「へえ、幼馴染みね……じゃあ、付き合ってる訳じゃないの？」

「そ、そうよ」

顔は同じ色のまま、蘭はそう答えた。

美佳子はその言葉を記憶してから、してやったりとほくそ笑んだ。その笑顔に、蘭は目をぱちくりさせた。

「私、実は工藤君に一目惚れしちゃったの。幼馴染みだったら、工藤君のことよく知ってるでしょ？ だから部活が終わったあと、相談に乗ってくれないかしら。あ、勿論今日じゃなくても、毛利さんの都合のつく日でいいから」

「え……」

美佳子の言葉に、蘭は複雑な気持ちになった。彼女の顔と机の表面を交互に見てから、静かに黙り込んだ。

そんな蘭の姿に、一方の美佳子は更に残酷なほどの笑顔を見せて、

両手を顔の前で合わせる

美佳子の姿に、蘭は唇をきゅっと噛み締めてから顔を上げた。

「じゃあ、今日は顧問の先生と相談しなきゃいけないことがあるから、あと三十分くらい待っててもらっていい？」

「平気よ。じゃあ、校門で待ってるわね。忙しいのにありがとう」

美佳子は荷物を取り、教室を出た。その彼女の姿を笑顔で見送りつつ、蘭は複雑な思いを拭いきれずにいた。

第四話 夕焼けの帰り道

「ごめんね、安堂さん。遅くなっちゃって」

「ううん、大丈夫よ」

帝丹高校の校門前。蘭は、携帯をいじっている美佳子に話しかけた。

美佳子は携帯を閉じ、蘭の隣に並んだ。

「じゃあ、行きましようか」

それを合図に、二人は校門を離れた。

夕焼けを背にした帰り道、美佳子は作戦を実行した。

「ねえ、工藤君ってずっと前からモテてたんでしょ？」

「彼と幼馴染みのあなたが羨ましいわ。私には、そういう人いないもの」

全ての美佳子の質問に、蘭は曖昧な答えしか返せなかった。美佳子が何か言葉を発する度に、心が軋んだ気がしたのだ。美佳子の笑顔と正反対に、蘭の顔は暗いものになっていた。

そんな中、美佳子はそれを横目でちらりと見ながら更に新一について話題を投げ掛ける。

暗い顔をしている蘭に、色んな言葉を使って優しい女を演じる。

これの繰り返し。心の中では、美佳子はずっとニヤニヤしていた。

物事が、ここまで綺麗に進んでいくなんてと。

(これで彼女は、工藤君を諦める。私みたいな女が、ライバルと知ったらね。そして、彼女は工藤君を避けるようになる。その態度に、工藤君はシヨックを受ける。

そこで私が彼を慰めれば、彼はきっと私に振り向くわ)

しかし、物事は美佳子の思い通りに進んではくれなかった。

突然美佳子の隣にいる蘭が、ピタリと歩を止めた。

前の方を、真ん丸になった目でじっと見つめていた。

暗かったはずの表情は、驚きに変わっていた。

蘭の目線の先を、美佳子は静かに追っていた。

そのゴールには一人の帝丹高校の制服を身に付けた男。彼の姿を見て、美佳子も目を見開いた。

その高校生は、新一であった。

(どういうこと？ 彼は用事があるからって、帰ったはずよね。じやあ、ずっと付いてきたとか。それとも、毛利蘭を待ってた？)

自分に問いかけても、混乱している故に答えは出ない。

そんな中、新一は美佳子たちの元に近づいてきた。そして、蘭の腕を掴んだ。

「え？」

「悪いな、安堂。用事があるって言ったろ？」

蘭に構わずそれだけ言うと、呆気に取られた美佳子をその場に残して、さっさと蘭を連れて歩いていった。

蘭は目まぐるしい展開に訳も分からないまま、新一に半分引つ張られながら歩いていった。

美佳子に言われた言葉を思い出しながら。

(確かにわたしと新一は、物心がつく前からずっと一緒にいた、幼馴染み。いつのまにか、新一がわたしの隣にいてくれることが、当たり前前って思えた。いつのまにか、気づかないうちに新一を好きに

なってた)

でも新一は、どう思ってるんだろう？

目の前にある背中を見ながら、蘭は言葉にならない声で問いかけた。当然、新一はそれに返答することもない。蘭自身も分かりきっていること。

言葉にして聞きたいと思っている。しかし蘭は、そんな勇気が持てなかった。

(新一に嫌われるのが、怖いから。それに、あんなに綺麗で積極的な女の子が、新一を好きなんだもの。敵うわけないよ)

「蘭!」

新一の声で、はっと蘭は我に返った。蘭の目の前には、いつのまにか新一の顔があった。

(あれ、気づかなかった。新一、わたしを心配してくれてるのかな)

「安堂に何か言われたんだろ？」

新一の言葉に、蘭はぴくつと体を震わせて俯いた。

凶星と言うことを、新一に教えたも同然だった。

しかし蘭は何も答えることもなく、考え込んだ。

(どうして新一には、わたしの考えてることが分かっちゃうんだろう？ 隠していたつもりでも、新一を騙せたことなんか一度もない昔から、ずっと一緒にいるからかな。だけど、言えない。安堂さんが新一のこと、好きみたいだなんて)

考え込めば考え込むほど、蘭の中にどんどん何かが押し寄せてくる。

蘭はそれを振り払い、目をぎゅつとつむった。

新一が気づいた時には、すでに遅かった。蘭は、泣いていたのだ。新一の問いかけに応じることもなく、ただ泣いていた。

蘭は、透明で目に見えない涙を流していたのだ。

新一にとって、こんな蘭の姿を見るのは辛かった。

コナンとして新一が蘭のそばにいたとき、よく目にしていた姿。それは全部、自分の馬鹿な好奇心のせいと分かっていた。しかし、今何故蘭がこうなっているかは分からない。

だからこそ、新一は蘭に再度聞いた。

「蘭、本当のことを言ってみる。どうしたんだ？」

こんなオレじゃ、何も出来ないかもしれないけど

そう付け加えて。

しかし蘭は、負の笑顔を浮かべて答えた。

「何でもないの。だから、心配しないで」

それだけ言うと、新一の横をすり抜けて走って行ってしまった。

(隠しきれてねーじゃねーか。どうしてそんなに背負い込むんだよ)

その時の新一には、夕焼けに照らされる蘭の後ろ姿を見送ることしか出来なかった。追いかけていたいと思っても、体が動かなかった。

第四話 夕焼けの帰り道（後書き）

さて、美佳子の思惑にはまっけてしまった蘭。そんな蘭から何も聞けなかった新一。そんな新一を奪い取るべく動く美佳子。この三角関係は一体どうなる！？そして新一らのクラスの劇『白雪姫』の行方は！？乞うご期待です

第五話 確信

次の日の昼休み。周りは皆、他愛ない話に華を咲かせていた。

そんな中、美佳子は読みかけの推理小説を開いていた。

そして、その小説の内容に似つかわしくない笑みを浮かべていた。

彼女の顔は小説のページとページの間にあったが、目だけは蘭に向かっていた。

園子と、昼食をとりながら何かを話している。

そんな蘭の様子は、どこかおかしい。いつもの明るく活発な彼女とは違っていた。

園子が話しかけているものの、曖昧な返事しか返せていなかった。

口の端を上げて、小説がなければ周りからおかしいと思われるくらい嫌味な笑み。

美佳子は、しばし思考に耽^{ふけ}った。

(やっぱり、相当なショックを受けたんでしょうね。鈴木さんに話し掛けられても、さつきからずつと俯いているままじゃない。フフ、彼女って、一人で抱え込むタイプなんでしょうね。

ちようど良かったわ。作戦、大成功。いい気味。いくら公認って言ったって、本人が付き合っていないって言うんだから。私が工藤君と付き合ってたって別にいいじゃない)

確かに美佳子は昨日、思いもがけないことに驚いていた。

蘭をギリギリと追いつめていたところの、作戦・想定外の新一の登場。

しかし今この時では、そんなことなど意識の外。

頭の中には、美佳子にとっての悦びである近い未来の空想が描か

れていた。
そんな中に、その空想の中の重要人物である新一が美佳子の席に寄ってきた。

この手のことに慣れている美佳子でも、その新一の感情は表情からは読み取れなかった。

しかし空想に足を数メートル踏み込んでいた彼女には、悪いことなど思い浮かばない。

自分にとって、都合のいいことだけが、彼女の頭を埋め尽くす。

(これで、工藤君は私のものだわ)

「安堂。ちょっと話があったから、屋上に来てくれねーか？」

「分かったわ」

それを確信付けるように、新一の言葉が美佳子の耳に入り込んでくる。

その瞬間、蘭を、勝ち誇ったように睨む。

色々、ありがとう。工藤君のこと、諦めてくれて。

美佳子の視線にすぐ気づいて、蘭は気まずそうに目を逸らした。悲しそう。すぐにそう思ったが、それもまた蘭にとっては嫌味と気づいた。

それから少し視線をずらすと、園子のお世辞にも美佳子を良く思
つてはいるとは言えない顔。
しかしそれを跳ね除けるように立ち上がって、美佳子は新一の後を
ついていく。

(これからは、私が工藤君の彼女よ！)

「話って何？」

自然を装って、美佳子は訊ねる。

新一に付いてきたものの、先に屋上に入って。

思わず逸る^{はよ}気持ち^{もち}を新一に悟られぬよう、表情を無にした。

今日は、風の強い日だった。当然、屋上では地上より強い風が吹
く。

髪をさり気なく整えながら、新一からの言葉を待った。

新一は屋上のドアを静かに閉め、ポケットに手をつ込んだまま
歩いてきた。

そして、美佳子から少し離れたところにまた静かに止まった。

その美佳子は、当然新一はこれから告白をする、と思っていた。

どこか気まずい雰囲気。痛い間。静かな周り。

こんな状況を、シチュエーション美佳子は幾度となく経験してきた。けど、これは彼女にとって今までで一番嬉しい間だった。

そんな中。その間を、鋭い新一の声が遮った。

「オメーなんじゃねーか？ 昨日から蘭の様子がおかしい理由」

第五話 確信（後書き）

相変わらず更新が遅くてごめんなさい。

世間は夏休み真っ盛り（もう終わりがけてますけど・・・）ではありますが、毎日忙しくて・・・

余談ですが、サブタイトル『確信』は美佳子のこと（実際は勘違いでしたけど）でもあり、新一のこともあります。

第六話 化けの皮

「オメーだろ？ 蘭の様子がおかしい理由」

屋上。昼休み。男女が二人、向き合って立っている。

如何にも告白のシチュエーションと言えるような中で、そんな言葉は発せられた。

”女”こと、美佳子は目を微かに見開いて、頬をひくつかせた。彼女にしては、これでも表情を出さないようにしたつもりであった。相手の表情から感情を読み取ることを得意としている新一に対しては、そんな抗いは無意味に等しかった。しかし美佳子はそれに気づかず、惚けて言った。

「何のこと？」

それに対する新一の表情に、やっと気づいた。すでにそれは疑問ではなく、確信であると言つことに。しかし言葉を言ったときには既に遅し。新一は美佳子を軽く睨んでいた。

「とぼけんな」

静かな声。一切乱れない表情。直立不動。

だがそれはどこか怒りに満ちているようにも感じられる。

美佳子はその表情を、心を探るようにじっと見据える。

今まで一回も見たことのなかった顔。想像したこともなかった顔。

新一に対するイメージさえも、ガラガラと崩れ去った。

悪い意味でも、良い意味でもない。

ただ単に、彼女の中での化けの皮が剥はげただけ。

そうか。工藤君は、彼女になると躍起になるのね。

それが分かった美佳子は、半分諦めた様子でフツと笑った。

「昨日のこと？ 別にあなたには関係ないじゃない。それとも、彼女にでも頼まれたのかしら」

「テメー、開き直ってんじゃねーよ！」

美佳子の嫌味を伴った笑顔と言葉が、新一の腕を動かした。

一瞬の出来事だった。彼女の胸ぐらを掴もうとしたのだ。

しかしそれを見切つて、美佳子は新一の腕を払って軽く肘の関節を極めた。

どこか鈍い痛みが、新一の肘全体にかかる。

「なっ」

「言っ
てなかつたかしら？ 私、神奈川の空手の県大会で優勝した

の。意外でしょ」

一瞬気を取られた新一に言い聞かせるように、無駄なことまで口走った。

言い終えてから、更にきつく力をかける。

そんな中でも、新一の美佳子に対する怒りは収まっていなかった。自分の心の中で、勢いを増しつつもあった。

燃えている炎に、油を少しづつ注ぎ込んでいるみたいに。

美佳子はどこか挑発するように、その新一に言った。

「工藤君、彼女のことになると急に熱くなるのね。それは良いけど、彼女とはちよつと温度差があるみたいよ。昨日、彼女はあなたをただの幼なじみとしか思っていないって言ってたし」

あたかも思い出したかのように、美佳子はそう言った。

本当は頭の中に、その言葉はずつと浮かんでいたのだが。言いたくて言いたくて言いたくて、しょうがなかった。

ここが良い機会と、直感で口から言葉を出したのだ。

それでも新一は表情を一切崩さず、言い返す。

「それも、何かの作戦か？」

「人聞きの悪いこと言わないでよ。これは本当。工藤君が帰った後に彼女から聞いたの。毛利さんは工藤君のこと好きなの？ って。そしたら彼女は、そう言い返したって訳」

敢^あえて語尾を強くし、美佳子は新一の言葉に更に言い返した。それに新一は、極められていた手を無理矢理に払った。彼女に対する怒りに任せたわけではない。別の感情でだ。

完全に極めなかったことを美佳子が後悔しているのを横目に、新一はゆっくりと屋上の金網へ向かう。

そこに到着するとを金網の一部を掴み、俯きがちになった。

「オメーの言う通り、アイツがオレのことをそう片づけたとしても……オレは違うんだよ」

ちょうど、風が止んだ瞬間に、そう言った。

声は新一自身や屋上全体にだけでなく、美佳子の全身にも大きく響いた。

そして、もう一人の耳にも。

第六話 化けの皮（後書き）

今回のサブタイトルは『美佳子の思う新一の第一印象』と『新一の思っていた美佳子の表の顔』の二つに掛けてみました。お互いのそれが、お互いに剥がれた話であつたので。分かつた方はいらつしやいましたか？

さてさて、最後の一文。一体誰の耳に届いたのでしょう？まだまだ忙しい作者なので、更新が遅くなってしまうかもしれません。でも、出来るだけ時間を見つけて書きますので・・・（><…;）

第七話 見えない糊

新一と美佳子が教室を出たあと、クラスの面々は彼らが何をしにいったのかについて意見を出し合っていた。

そのせいでいつもより騒がしかった教室内を、園子はくるりと見渡す。

それだけでなく、目の前にいる親友の表情もちらちらと心配そうに見た。

「蘭、大丈夫？」

「うん」

少し間を空けて、その言葉にそぐわない声色で呟くように言った。

そんな蘭に、園子も思わず黙り込んでしまう。

声色だけでなく、表情も仕草もどこか寂しい。

行き場のない視線が宙を右往左往するお陰で、何とか今を保っているようだ。

「工藤君が安堂さん呼び出した理由、告白なんかじゃないと思うよ」

近くの席のクラスメイトが、騒がしい空間の中にある静寂に包まれた場所にいる蘭に言った。

静かに振り向いた負の感情を背負ったような顔に、彼女は続ける。

「だってさ、安堂さんに話しかけた時の工藤君の表情、告白って感じじゃなかったし」

「そうよ。あの恋だの愛だのに超鈍感で推理オタクの新一君が、告白なんてすると思う？ それに、安堂さんみたいなタイプに彼が靡くとは思えないし。ホラ、言ってきたよ。わたしが妻ですって」

「っ、妻なんかじゃ」

ないって。

いつもの園子の決まり文句に反論しかけて、止めた。

（そう。新一とはただの幼馴染みだけだよ。わたしだけがそう思っていないだけで、新一は）

そんな蘭の様子に、園子は真剣な表情で言う。

「そろそろ素直になっても良いんじゃない？」

長年の親友である蘭は、ちゃんと分かっている。

こんな表情の園子が何かを言うときは、茶化したりなどしていないことを。

それ故蘭はまた黙り込んでしまった。

様々な思いが、複数の糸となって頭の中に張り巡らされる。

蘭はそれを何とか解いて、自分の真意を示す場所に繋がる糸を探しだそうとする。

しかし、簡単には上手く行かない。

糸をすぐ見つけられても、ほんの少しの躊躇いが足の裏と床をびったり張り付けて中々抜け出せない。

そんな蘭に、園子は見えない糊を剥がす言葉を告げる。

「何なら、わたしが新一君に伝えてきてあげようか？」

「え？ それは」

言いかけてから、蘭は少し遅れて吃驚びっくりした。

体も魂も、そして足の裏も軽くなっていた。

さつき張り付いていた場所から、抜け出せていたのだ。

「……大丈夫。自分で、言えると思うから」

改めて、さつきとは全く違った表情で言った。

蘭のそんな言葉に、園子は頑張っつて、わたしは蘭の味方だからね、と応援をこめた笑みを浮かべた。

幾つもある机と、人たちの間を抜けて蘭は教室を出ていった。

そして、教室の近くにある階段を上がってゆっくりと屋上メイン・ステージへ向かって行く。

屋上、その空間をあとガラス戸一枚だけが隔てている少し広めな踊り場に出た。

戸は数センチだけ開いているのが見える。

その隙間に手を差し入れて、横に戸を流した。カラカラと独特の音を、その場に響かせた。

体を少しばかり出すと、屋上の金網の傍に二人の影が見えた。

どうやら自分にはまだ気づいていないと確信して、歩みだそうとした時。

その影のところから、新一の声が聞こえてきた。

「オメーの言う通り、アイツがオレのことをそう片づけたとしても……オレは違うんだよ」

え？ その”アイツ”って、まさか。

その場に立ち止まったまま、蘭は目を見開いた。

第七話 見えない糊（後書き）

サブタイトルの由来は、七話での蘭が”見えない糊”（＝素直になることへの躊躇い）を剥がして屋上へ向かったことから。

あ、六話の最後に出てきた”もう一人”とは、蘭のことですよ。何となくは予想できていたでしょうか？

本当はこの先の云々ももうちょっと書きたかったんですけど、そう なっちゃうと無駄に長くなっちゃうので（第一話で長くしすぎて、ダラダラしてしまった経験を活かして）次回へ延ばしました。また 面白い？ところで切ったので、早く更新しろと文句が聞こえてき そうですね……。とりあえず先に言っておきます。来週の土曜日 までには必ず更新致しますよ！ それまで、申し訳ないんですがお 待ち下さい（><）

第八話 風向きが変わる

あの言葉の意味は、一体。

蘭は自分の右耳を、風に揺らいでいる二つの影に近づけようとした。しかしそれでも、また吹き始めた彼らの話し声は蘭にはよく聞こえない。

そんな中でも、その彼らの間では話が進行中だった。

金網を掴む新一の、憂いを帯びた蒼い瞳に美佳子の視線は引き寄せられていた。

新一自身、憂いを帯びているわけではない。

むしろその逆の感情、目の前の美佳子に対する冷ややかな視線を向けているつもりだった。

それが瞳ににじみ出て、蒼く見えているだけなのである。

「どついつ意味？」

嫌な予感が、風と共に全身を何度も通り抜けて行く。

しかしそれを認めたくない一心から、口元から言葉は溢れ出てくる。空気を読めていない美佳子の愚問に、新一はピクリと眉を歪ませた。

「言わねーと分からないのか？」

ああ、やつちやったかな。

そう自虐的になり、美佳子は震える腕で髪をかき揚げた。

憂いを帯びた瞳は、いつの間にか鋭く美佳子を貫いていた。

探偵が証拠を突きつけられている犯人を、じわりじわり追い詰めていくかのように。

でも、今更謝るなんて。

「そうね。あなたが本心を一言でも語れば、毛利さんにもう何もしない。そうでも言えば、どういう意味か言ってくれる？」

(わ、わたし?)

心が乱れ、語調を荒げた美佳子の言葉は蘭の耳にも届いた。そうすると、さっきの新一の言葉の意味が分かってくる。

蘭の頭の中には、一つの方程式。

『あの言葉の“アイツ”はわたし』

一瞬にして、蘭の顔は熟れたトマトのように真っ赤になった。

心が混乱して、壁ではなくガラス戸に思わず寄りかかってしまった。

当然ストッパーのないそれは、無情にも勢いよく蘭から離れていった。

「ぎゃっー」

バランスを崩し、ガラス戸の向こうこと、屋上側に両手を突いてしまった。

これで、顔だけでなく、全身を屋上に入らせてしまうことになった。風の強いそこでも、蘭の驚きから出た声は鋭く空気を貫いた。

顔を上げると、目を逸らしていたはずの二人は蘭に目を合わせていた。

「ら、蘭？」

「あ

特に新一にじっと見られて、蘭は今の状況を思い出してパツと立ち上がった。

蘭にとっては急いでいたのだが、実際は周りから見たら遅かった。

そんな二人を見た後、美佳子は密かにフツと微笑み、蘭に向かって歩いてきた。

蘭から二、三步離れたところに立ち止まると、音量を下げ、

「勘違いしないでくれる？ 私、別に彼を諦めた訳じゃないのよ。ただ、用事を思い出しただけ。早退しなきゃいけない大事な予定が、ね」

そう言って、ガラス戸を少し押してさっさとそこを出ていった。

彼女の行動の意味が全く分からない蘭は、呆然として階段の先を

見つめるばかりであった。
新一が、そばまで恐る恐る近寄ってきていることにも気づかないくらい。

「なあ蘭」

「え？」

突然後ろから、遠くにいたはずの音がすぐそばで響いて驚いた。目をぱちくりさせて、色々なものに視線を必死に泳がせた。

さっき新一がいた金網の辺り、そのもの、屋上に設置してあるタンクなど、何でも良かった。とにかく、気を紛らわせるようなものを探した。

「いつからそこにいたんだ？」

「い、いつからって……」

一番聞かれたくなかった質問が飛んできて、蘭は少し間を空ける。ただでさえ混乱している頭は、その答えを探すのに苦労した。そんな間が出来たせいで、何故か自分が何でそう聞いたのか分からなくなった。

（聞かぬーほうがよかったのか？）

どこか気まずそうに頭をぱりぱり搔く新一に、蘭は泳がせていた視線を一点に集中させた。

そして、コホン、と咳払いを一つする。

「オメーの言う通り、アイツがオレのことをそう片づけたとしても……オレは違うんだよって新一が言ったところからよ、探偵さん？」

似ていない声まねをされ、新一はああ言ったことを色んな意味で後悔した。

真剣に話していたから、まさか蘭に聞かれているなどは予想がつかなかった。

周りが見えなくなっていたであろう自分に気づき、今更になって恥ずかしくなる。

それに加え、どこか挑戦的な態度の蘭に、何をすればいいのか余計に迷う。

「あ、あのな、蘭。オレは」

「ねえ、新一」

「え？」

何かを言おうとしたところに、蘭は急に口を挟んだ。

その真意が分からず、新一は思わず言いかけた言葉を急停止させた。

そんな新一を一瞥し、蘭はクスツと笑いを漏らした。

「劇、絶対成功させようね」

「あ、ああ。オ、オメーに言われなくても分かってるよ」

「気まずくない間を空けて、新一はそう答えた。」

第八話 風向きが変わる（後書き）

珍しく2日連続更新です。

でも多分、3日連続はないです。

学生の身分ゆえ、平日は暇が無いので・・・

第九話 元通り

新一と蘭は、最近起こっていたことに関して一段落ついたため、屋上から戻り教室に足を踏み入れた。

昼休みの真っ只中であるため、入ってきた新一と蘭に一斉に目を向けた。

それに驚いて一旦足を止めるものの、すぐにまた動き出して完全に中へ入る。

美佳子の言葉を思い出して、蘭は今日室内を見渡していた。

それから少しばかり遅れ、新一も視線を彷徨^{うろた}かせてみると、美佳子の姿が見えないことに気づいた。

「あ、蘭！ それと、新一君も」

「オレはついですかよ？」

あからさまな苦笑いを表に出した新一を一瞥してから、園子は戸惑い気味で歩いてきた。

いちいち反応する必要がないことなのだろう、と彼女なりに考えつつ。

「安堂さん、用事があるって言って早退したのよ」

「そっか。本当に、そうだったのね」

「えっ？」

もうすぐ、昼休みの終わりを告げるチャイムが校内に響き渡る時間である。

蘭は壁掛け時計を横目で見ながら、呟くように言った。

そしてどこか複雑な気持ちを拭い去れぬまま、視線を園子に戻した。そんな蘭に代わり、新一が目を真ん丸にしている園子に一言びしやりと告げる。

「さつきな、急な用が出来たとか言って屋上を出てっただよ。それにな」

「それに、何？」

(安堂の態度、微妙に変わっていた気がしたんだよ)

そう言いかけて、新一は口をつぐんだ。別に言う必要のない言葉だったからだ。何もなかったかのように振舞ってみるが、園子は余計気になっていくように感じた。

園子は言葉の抜け落ちた部分を探すように、言葉の主の顔を見る。しかしそこにはヒントさえなくて、間を埋めるように、全く乱れていない髪を整えた。

「まあ、別に言いたくないなら言わなくてもいいけど。それよりあなた達、何か忘れてない？」

「あ」

不意を突かれて、思わず間抜けな声をあげてしまった。

一瞬のうちに様々な思いが、脳内全方向へ流星の如く交錯していく。いつも事件の調査、もしくは推理をする時の癖だ。

そんな癖が良いんだか悪いんだか、と言うこともすっかり抜け落ちた。

（そう言えば、劇のことすっかり忘れてたな。やべ、本番っていつだっけ？）

考えを巡らせるうちに、何百回も飽きるほど聞いた単一的なメモディーが左耳に入ってきた。

さっきまで騒いでいた皆は、だるそうにそれぞれの席へ着く。

彼らに倣い園子は自分の席に戻りながら、新一と蘭に言う。

「本番は二週間後。それまでみっちりやるからね。心配ないと思うけど、ちゃんと練習来なさいよ？」

園子としては二人に向けたものだったが、新一にとっては最後の文の矛先が自分に向いている気がした。

思い出したのは、本番の日にちだけではなく、自分が何日か前に漏らしてしまったあの失言。

しかし今さら何か言ってもしょうがないから、中くらいのため息をついた。

「バー口、わあってるよ。言ったからにはちゃんとやっからよ」

「そうね。台詞だとか色々覚えなきゃだし」

蘭の言葉に、素直になりきれない新一は気だるそうな表情を崩さずに頷いた。

実際新一は今、全くもって台詞を覚えていない。この状況にも危機感を持つようになった。

丁度話が切れたところで、教師が教室に入ってきた。

第九話 元通り（後書き）

あと三話くらいになりそうです。

こんなへボ小説ですが最後までどうぞよろしくお願いします。

第十話 どんでん返し？

「さて、いよいよ前日になった訳だけど」

本番前日の練習開始前に、監督兼脚本担当として園子が切り出した。

言葉をあえて止めた園子は、ある一点を見つめている。彼女の話の続きを聞きたいじれったさから、その視線をクラスメートたちは追う。

「本当に、本番でキスするんでしょうね？」

視線の終着点にいる、二人に向けて言葉を続けた。

いつものように、きつと真っ赤な顔になってあたふたするに違いはない。

その場にいた者たちは皆そのような類のことを考えていた。しかし彼らの予想を裏切るように、当人らはやたらと冷静であった。

「さあ？ わたしは目をつぶってるだけだから分からないけどね」

「心配すんな。何とかすっから」

ある意味で園子のより痛かった蘭の見えないパンチに、新一は内心苦笑いしつつも表情をクールに保った。

(八八、蘭の奴。この前の一件があつてから何か調子乗りやがつて)

憎まれ口を内心叩きつつも、笑顔の戻つた蘭がすぐ隣に居ることに安心していた。つい最近までは気まずい空気が流れていて、話をするのにも迷いを伴っていたから。

美佳子のことは、一応解決したものだと考えていた。

「蘭、新一君に劇を超えたヘンなことされたら、本番中でも思いつきりぶつ飛ばしじゃないなよ。皆が許すから」

そう妙に真剣な表情で言つて、蘭の空手の構えの真似をした。

冷静を装っていた二人の顔も、さすがに耐えられなくなって真っ赤になつた。

「ヘンなことつて何よ!」

「ヘンなことつて何だよ!」

思わずに声が揃つて、真剣な表情だつた園子も含めて皆が一斉に笑つた。

二人は笑い声に包まれていても、それに暖かい感触があることを分かつていた。自分たちが笑われているのだけど、この空間はとてつもなく居心地が良いと感じていたのだ。

そんな彼らの姿を、美佳子が遠くから見ている。

彼女は皆に仲間外れにされている訳ではない。自分から、今更劇には参加しないと園子に言っているのだ。

（流石の私も降参だわ。こんな気持ちになったの、初めてよ。私、手に入らないと分かったものには執着しない性格みたい。今まではみんな簡単に手に入っていたから、気づかなかったわ）

フツ、と笑みをこぼすと、美佳子は彼らに背を向けて歩き出した。

そして、あっという間に本番当日になった。

「じ、こんなにお客さんが来てるの？」

まだ制服姿の蘭は、準備の進められている体育館のステージから客席を眺めていた。勿論、幕の隙間越しにである。

前日にはパイプ椅子しか無かったそこには、数えきれない程の顔が見えた。思いもよらなかつたその数に、心臓の鼓動は速まっていけばかり。自分の耳にも、はつきりと聞こえているぐらいであった。

「あら、これでも少ないんじゃない？　わたしはもっと来て欲しかったけどね」

蘭の上から、台本を丸めて持っていた監督こと園子の声が聞こえてきた。

今の状況を冷静に語れる彼女に、余計蘭は緊張してきてしまった。体が固まってしまい、心でのコントロールが全く出来なくなっている気がした。

「もう、園子ったら！」

「あれ？　入り口にいるのって……」

急に話題を変えた園子に、蘭は思わずその言葉の中に出てきた名詞の部分に視界の中心を持っていった。そこには、安堂美佳子の姿があった。

幕の隙間の二人の姿が見えているのだろうか、手招きをしている。

「安堂さん、わたしたちを呼んでるんじゃない？」

「そうね。とりあえず行ってみる？　まだ劇が始まるまで、三十分もあるし」

目立たないようにステージ裏から出て、美佳子のいる体育館の入り口へ二人は駆けていった。二人の姿が隣にあったことに気づいた美佳子は、二人が口を開く前に行動を起こした。迷わず、蘭の腕だけを掴んだのだ。

「毛利さん、ちょっと来てくれる？」

え、わたしは？　と自分で自分を指差す園子は無視して、蘭だけをぐいぐい引っ張っていった。その力が余りに強く、蘭は戸惑いを覚えて抵抗することが出来ずにいた。

「安堂さん……？」

第十話 どんでん返し？（後書き）

最終話まであと二話です。さてさて、美佳子はここまで来て蘭だけを連れて何をやらかすのでしょうか？ サブタイトルが『どんでん返し』だから、まさか…？

第十一話 準備完了！

「ホラ、早く入って」

蘭が美佳子に連れてこられたのは、二年B組の教室だった。彼女除いた全員が何かしらの形で劇に関わっているので、中には当然誰もいない。

蘭の背中を軽く押してから入ってきた美佳子は、教室にある前後両方の扉の鍵を閉めた。

その行動に思わず身構えた蘭に動じることもなく、自分の机の横に掛けてあるバッグを手に取った。

「どこでも良いから、座って」

「え？」

戸惑う蘭にとっては、その言葉は余計に事態を複雑化させるようなものだった。しかし、とりあえず目の前にある席に腰かけた。

その机に美佳子は例のバッグをぶつきらばうに置いた。そして華奢な手で、閉じられているバッグを開いてゆく。その中身には……

「メイク道具？」

思わず口に出すと、美佳子はその中からヘアバンドを取り出し、蘭の前髪をさっと上げた。そして、制服の袖を肘まで捲り上げた。

「工藤君に釣り合うくらいの綺麗な女じゃなきゃ、相手役はさせたくないから」

そう言う間にも、どんどん蘭の顔にはメイクが施されていった。プロ顔負けと言っても過言ではないくらいの手際の良さと技術で、蘭自身が一番驚いていた。目まぐるしい展開に付いていけなくて、硬直状態のまま時間を消費した。

そしてものの十分後、メイクは完成した。

「あらら、残念。思ったたよりもよくなっちゃったわね」

無表情で言うてから、一番近くの扉の鍵を開けた。その音は、何とも言えない空気の流れを変えた。

「……連れ出した私が言うことじゃないけど、もうそろそろ時間やばいわよ？ 急いだほうがいいんじゃないかしら」

「あ、本当だ！ わざわざありがとね、安堂さん」

美佳子を一瞥すると、廊下の天井にある時計を見ながら体育館に

向かって掛けていった。

蘭のそんな姿に、やれやれと微笑みを漏らしてから、後をゆっくりついていった。

「ゴメン、皆！」

蘭の声を耳に感じて、皆一斉にその方向へ目をやった。

特にずっと蘭のことを考えていた新一は、無意識の内に真っ先に駆け出していた。その後を園子が付いていく。

「オメー、安堂に何をされたん……だっ？」

目に入ってきた蘭の姿に気を取られ、真剣な問い掛けが間抜けな言葉になってしまった。

（すっげー綺麗……）

感想が見つからず、口をパクパクさせつつ赤面している新一を、

蘭は不思議そうに見つめる。自分に見とれているなど、努々（ゆめゆめ）思わなかった。

「そのメイク、まさか安堂さんが？」

新一の後ろで立ち止まっていた園子の言葉に、謎めいた微笑みを浮かべた。

「彼女、本当は凄く優しいんだよ」

消え入るほどに小さく囁いた言葉は、誰の耳に入ることもなくた。

やっと我に返った新一が、当然の如く蘭の聞こえなかった言葉を知ろうとする。

「おい蘭、聞こえねーぞ？ もう一回」

「新一には秘密」

「……何でオレだけ」

「さあね」

「ホラ、そろそろ時間よ！ 王子様と白雪姫は早く舞台裏に行かないか」

園子は放っておいたら永遠に繰り広げられそうな会話を遮って、二人の背中を押した。驚いていた両方に向かって、ウイंकを投げ掛けた。

（頑張ってるね。おしどり夫婦さん？）

第十一話 準備完了！（後書き）

次回で最終回（の予定）です。なので、早くお届け出来るように…
…頑張ります。

第十二話 明日はもっと……

『皆様、長らくお待ちせしました。これから二年B組の劇・白雪姫の開演となります』

スピーカー越しの音が響いて、観客たちは次々と席に着いていった。

それから数秒後、深紅のカーテンが重々しく開くと、無数の拍手が迎えた。

それに伴ってあらわになっていく蘭の姿に、誰もが見とれていた。

「ラララ……」

蘭の透き通った歌声が、観客の耳にそのまま届いていく。

そんな蘭の後ろを、新一は通り過ぎてから静かに立ち止まった。

「ああ、私の心に響くあの澄んだ美しい声の持ち主は、一体何者なんだ？」

(慣れねえな、この台詞)

観客たちには全く気づかれていなかったようだが、新一は恥を捨てられていなかった。

そんな新一をよそに、劇はどんどん進んでいった。

「白雪姫っ、白雪姫！ ……ダメです、起きません」

「どうすればいいの？」

魔女に毒リンゴを食べさせられ、眠ってしまった白雪姫がガラスのベッドに横たわっているシーン。新一は、舞台裏から劇を見守っていた。この後は、小人たちが魔女に白雪姫を目覚めさせる方法を聞きに行くシーンだ。出番までは、時間がまだある。

そんな中、新一を後ろから魔女の衣装に身を包んだ園子が突っついた。新一は彼女の気配に全く気づかなかつたため、体を震わせてから振り向いた。

「な、何だよ」

「リップクリーム塗った？」

真剣な態度とは正反対の言葉を投げ掛けられて、新一は思わず拍子抜けした。

あのなあ、と続けると、スタンバイしなくてはいけなくなった園子は新一の言葉を遮ってピシリと言った。

「ちゃんと姫を捕まえなさいよ、王子様？」

バール、オマーに言われなくてもちゃんとやつからよ。そんな誰にも聞こえない言葉を、舞台へ向かう園子の背中に軽く投げた。それは、どうやらぶつかってくれたらしい。

そして、例のシーンへと物語はたどり着いた。新一は軽く咳払いをしてから、舞台へと上がった。

小人役の1人が台詞を言う。

「王子！ 白雪姫を目覚めさせるために力を貸して下さい」

「彼女のためなら何でもする。どうすれば良いのだ？」

「白雪姫にキスをして下さい」

「ああ……分かった」

小人役らの視線の先を目指し、新一は静かに歩き始めた。会場が静まり返っているため、その足音も大きく響く。

新一はガラスのベッドに近づくと、心臓の鼓動が速まってくのを感じた。

近くまでたどり着き、ベッドの中を覗き込むと、本当に眠っているかのような蘭がいた。メイクが施されていて、いつも近くにいる自分さえも知らない顔を見て、新一は改めて深呼吸をする。

音も立てずにしゃがみこむと、視界の端にカンペを持った園子が見えた。

『直接五秒間』

だから、分かっているっつーの。そう目で言うと、新一は蘭の頬に手をそつと添え、唇を蘭のそれに運んだ。微かに触れたか触れなかったかの微妙な距離を保ちつつ。

新一がちゃんと五秒数えてから唇を離すと、蘭は目をゆっくり開け、体を起き上がらせた。

「王子、様」

しゃがんだまま蘭に抱きしめられ、新一はバランスを崩しかけたが逆に抱きしめ返すことで何とか持ちこたえた。

無意識の内の新一の行動に、蘭は幕が閉じ拍手が止むまでそれに身を任せた。

「二人とも、凄く良かったわよ」

言葉にまだまだ答えられる余裕がない二人に、気を利かせて園子は付け加えた。

「まだ片付けまで時間あるし、ゆっくり帰ってきていいからね？」

「あ、うん」

園子がいなくなり、観客らも帰っていったために体育館の中には新一と蘭だけ。

どこか気まずい空気をまぎらわそうと、2人は同時に話し始めた。

「あのさ」

「あ、あの」

綺麗に被ってしまい、ますます変な空間が形作られた。しかしそれを断ち切るべく、新一が先に言葉を発した。

「マジで直接しちまって……えっと、えーっと」

発したのは良いが吃りっぱなしの新一に蘭は、恥ずかしげに笑った。そして新一の代わりに付け加えた。

「別に嫌じゃなかったよ？ むしろ」

嬉しかった。

その言葉に、新一は目を大きく見開いた。思わず、さっき蘭と触れた唇に手を持ってくる。

固まったままの新一に、蘭は何もなかったかのように更に続けた。

「先に戻ってるね」

「あ、待てよ。オレも行く」

新一の言葉を待たずに舞台からさっさと降りていく蘭。そんな蘭を追いかける新一。

いつもと変わらない日常を正反対にしたこの劇での出来事は、必ず両方の心に残り続ける。その証に、この時の二人の気持ちの中に“後悔”と言う名の感情は一切なかったのだから。

きつと、明日はもっと良い日になるはず。

そんな曖昧なのにごく確証を感じる思いを抱きつつ、夕日に照らされた二つの影は教室へと戻っていった。

ちなみに、戻って早々にクラスメイトたちからからかわれたのは言うまでもないことである。

第十二話 明日はもっと……（後書き）

綺麗に纏めるはずが、意外と内容がかさばって（？）しまい、いつもより長くなってしまいました。

それはさておき、無事完結を迎えることが出来ました。こんな駄文でしたが最後まで見守ってください。本当にありがとうございます！
感謝の気持ちで一杯です^^

近々……かどうかわかりませんが、第二話を始めとした文章の修正をする予定です。そこだけ美佳子の一人称になってしまっているの……内容の変更は一切ありませんので、ご安心を。その際には、気が向いたら覗きに来てみてくださいね。では、また。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0042c/>

angel's tears

2010年10月9日04時26分発行